

平成 30 年 5 月 24 日現在

機関番号：23103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K06400

研究課題名(和文)近代和風建築の形成 橋本市中心市街地における建築調査を通して

研究課題名(英文)Formation of modern Japanese style architecture Through building survey in the center of Hashimoto city

研究代表者

平山 育男 (HIRAYAMA, Ikuo)

長岡造形大学・造形学部・教授

研究者番号：50208857

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：和歌山県橋本市中心市街地における町並み調査を通し、特に近代和風建築の形成とする観点から試みたが、以下の諸点を明らかとした。

明治10(1877)年代後半は、和釘から洋釘への転換の時期であり、この間に複数の建物において和釘と洋釘の併用を確認した。つまり和釘から洋釘への転換は一定の期間があり、屋根裏など目立たない箇所から転換が進んだ。また、この傾向は広く見ると、同時期の全国における建造物、種類を問わずに普く確認できるものであった。つまり、建築においてはこれ以後、洋釘・金具の使用が急速に進み、一方で、濃尾地震の影響もあり、これらの変化は建築構造などにも影響を与えたと推察することができる。

研究成果の概要(英文)：We made the following points which we attempted from the viewpoint of making modern Japanese-style architecture especially through townscape surveys in the central urban area of Hashimoto-shi, Wakayama Prefecture.

In the latter half of the Meiji 10's, it was a time of conversion from Japanese nails to western nails, during this time we confirmed the combined use of Japanese nails and western nails in multiple buildings. In other words, there was a certain period of conversion from Japanese nail to western nail, and the conversion advanced from an inconspicuous part such as the attic. Moreover, this tendency was widely seen, it was able to be confirmed commonly regardless of the buildings and types in the same period throughout the country. In other words, in construction, the use of western nails - metal fittings has progressed rapidly, and additionally, due to the Nobu earthquake, it can be inferred that these changes have influenced the building structure, too.

研究分野：建築史

キーワード：近代和風 和釘 洋釘 和歌山県橋本市

1. 研究開始当初の背景

紀ノ川中流域、和歌山県橋本市の中心市街地、橋本、古佐田、東家地区は昭和60(1985)年以来、事前の歴史的建築調査がなく、当該地域内における全ての建物を破棄して新築する再開発と土地区画整理の事業が平行して再開されている。しかし、申請者らは平成10(1998)年以来連続的に、当該地域で解体される建物に対して徹底した痕跡調査を伴う建築調査を行ない、精緻で広範な復原、編年作業を実施することで基礎的な研究を固め、近世の橋本が塩市を始めとする在郷町、高野山下の宿場町として発展し、近代において変貌を遂げたことを示すに至っている。

そして、一連の調査を通し、橋本地区において享保6(1721)年建築の火伏家住宅、宝暦3(1753)年建築の牲川家住宅等を発見し、橋本の町並みが和歌山県内において屈指の質と量を誇ることを明らかにした。また、これらの成果により、一部の建物を国登録文化財として現地に残し、新しい町並みを創る手助けも行っている。加えて先般、昨今の経済情勢の故もあり、この再開発と土地区画整理事業について、当初計画地の凡そ半分に近い面積を「休止」とすることが橋本市議会において可決された。町並みは今後、既存の姿を保ちつつ、新たなまちづくりが進められる運びとなったのである。

ところで、橋本からやや入った九度山を始点とする高野・熊野古道が「紀伊山地の霊場と参詣道」として平成16(2004)年、世界遺産に登録された。橋本には江戸時代以後、高野街道の紀ノ川における無銭渡が設けられるなど、紀ノ川と密接な関係を持ちながら高野山下の重要な宿場町として発展したことも申請者らは既に明らかにしている。つまり、橋本こそが高野・熊野古道の

入口に本来は位置付けられるのである。

本研究ではこれら社会的な動きに対応すべく、橋本のまちと町並みがどのようにして形成されるに至ったのかを、近世から近代に至る建築資料を網羅的に当たると同時に、実際の建築物の調査から得ることのできる知見を具体的に対応させながら、実証的に調査・解明することを目的とするものである。

特に橋本においては明治30(1897)年代における鉄道敷設以後、橋本駅が既存にあった町並みの背面に開設された。このため町並みに向けて駅前通りが開設され、更に既存の町並みと駅の間を広がっていた畑地にも新たな町並みが拡大するとともに、旧来の町並みにも当時の新しい技術による建物が盛んに建てられるようになったのである。そして今やこれらの建物も歴史的な建造物として町並みの重要な構成員となっている。このように、近代になって新たに建てられた町家と近世の町家では、何が異なり、何が連続して伝えられたのであろうか。

本申請ではそれらの点を、伝えられた建築関係の資料と町並みを構成する建物の両面から解明しようと試みるものである。

2. 研究の目的

これまで和歌山県橋本市の中心市街地である、橋本、古佐田、東家地区を中心に100棟余の建築調査を続け、いわゆる歴史的な構法によっては昭和30(1955)年代初頭まで、町家が築かれ続けたことを確認し、一連の調査において建築関係資料を8戸から発見している。

これらの資料は江戸時代からのものであるが、多くは大正時代から昭和戦前期に記されたもので、この資料群の読解を通して近代における町家の形成がどのようになされたのかを手にとるように知ることができるのである。併せて、これらの資料を連続的に読み進め、実際の建物と比較対照するこ

とによって、近代における町家の生産のあり方がどのように変遷を遂げたかをより詳細に後付けることも十分に可能である。

期間内では、まずこれらの資料群を読み解き、橋本の中心市街地における製材業者の流入と時期、規模、形態を明らかとする。周辺において特に大正時代以後、製材業者の勃興が見られたが、その背景も含めて考察を進める。

加えて、資料からは橋本の中心市街地への機械製材された材に留まらず、木材全体の流入の様相を明らかとして行きたい。資料を瞥見する限り、この時期における住宅建築に際して材木は吉野山下の下市(奈良県)、高野山下の高野口に加えて大阪、堺へも買い付けへ赴いている。更に昭和時代のかなり早い時期から米材の表記も確認することができる。以上の動きを資料上から丹念に追い、近代の橋本における建築生産のあり方を明らかとして行きたい。

更に、近代においてこれらの製材及び外材等の流入が町家の構成に対してはどのような影響を与えたのか、これらは実際の建物調査を進めながら明らかにして行きたい。建物の調査はこれまで実施してきたように、再開発等で除去の対象となった建物に対して解体調査等を含む、徹底した復原考察を加えるものである。

即ち、本研究においては、近代における町家の造形的な変遷を、近代的な構法の導入、材料の流通、更に言えばそれらを押し進めた産業化などとの関係から明らかにしようとするものである。

3. 研究の方法

研究は、実地の建築調査と文献読解・考察を平行して進めて行くものである。

建築調査は平成 10(1998)年以来行っているもので、再開発に伴う除去建物に対して、解体を伴う精緻な復原作業及び編年考

察を行う。

文献調査は調査期間内においても新たな資料の発見に努める一方、既に見出した資料の翻刻化を進めるとともに、その読解から橋本における製材材料の米材を始めとする外材の流入の時期、数量、使われ方等について考察を試みるものである。

そして、以上を総合する形で実際の建物における製材及び外材が与えた影響を見て行こうとするものである。

4. 研究成果

和歌山県橋本市における中心市街地の町並みは再開発事業により多くの建物が存続の危機にあった。申請者等は、除去される建物に対して建築史の観点から徹底的な復元的な調査を実施し、近世から近代における建物及び建物郡の復原を試みた。

特に今回は、近代和風建築について和釘と洋釘の使用について焦点を絞り、研究を進めた。橋本市の中心市街地において、和釘と洋釘の併用が確認できたのは明治 17(1884)年建築の谷口家住宅店舗兼主屋であった。この建物では同年の上棟を記す棟札を止める釘が洋釘であったが、1階根太、2階床板を止める釘は和釘と洋釘の併用であった。一方、この建物から2軒西側に位置する旧恩知家住宅は明治 18(1885)年の建築と確認され、無記名の幣串、床の間の壁下地は洋釘止であったが、1階8畳の回縁は和釘止であった。これらのことから、和歌山県橋本市中心市街地では明治 10(1877)年代後半には和釘と洋釘が併用されたことを確認した。併せて全国に事例に当たると、明治 10(1877)年代後半においては広く建物の種類を問わず、和釘と洋釘が併用された事実を確認した。

加えて、当該地域においては大正時代中期における高野鉄道敷設以後、大阪における建築材料の購入、外材の使用を確認して

いる。

このように、近代和風建築は、技術面、材料面において近世とは異なる極めて近代的な側面に支えられながら、更にガラスなどの近代固有な材料を用い、構成が成されたと考察した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

[学会発表] (計 24 件)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

○取得状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年月日 :

国内外の別 :

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平山育男 (長岡造形大学・造形学部・教授)

研究者番号 : 50208857

(2) 研究分担者

藤川昌樹 (筑波大学・システム情報系・教授)

研究者番号 : 90228974

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :

(4) 研究協力者

()